

平成二十三年度

和歌山信愛女子短期大学附属高等学校

入学試験問題

国語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～18ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある一つの技術に着目してみれば、最初は「必要は発明の母」で出発する。こういうものがあれば便利なのに、という欲望が※イノベーションに結びつくからだ。ところが、いったん技術開発に成功すると、とたんに「1」発明は必要の母」に転化する。売る側においては、□ I 人々が求めていたかのようなふりをして次々と余分な機能を付加し、消費者の欲望を刺激するのに精を出す。これを受けて、消費者もそんな機能が必要だったと錯覚し、滅多に使いもしない機能がついた製品を買うのに血眼になる。2 このような相乗作用の中で技術は「進化」するのだが、結果的には資源を浪費して異様なものを作り上げてしまうのである。

□ II、わが家の電子レンジは、ごはん・おかず・解凍あたたため・魚や肉の快速解凍の機能があるだけでなく、根菜と葉菜の加熱区分まであり、トーストが焼け、ケーキ作りもできることになっている。□ III、九〇パーセント以上はごはんとおかずをチンするだけであって、その他の機能はA宝の持ち腐れである。ケーキなどは作ったことがなく、トーストは専用のトースターのほうが速いしきれいに焼ける。そういう家庭が多いせいかな、最近の電子レンジは温め専用の単能型のものがふえているそうだ。余分な機能がないだけ長持ちする利点もある。いったん多機能に広がった技術が見直され、本当の必要に合ったものへと回帰するのかもしれない。

□ IV、ケータイはどのようなのだろうか。ポケベルから携帯電話が生まれたときは、基地局が少ないため強い電波を使わざるを得ず、かさばって重かった。しかし、いったん小型・軽量化の可能性が開かれると「進化」は急速であった。声の交換から始まり、写真 a サツエイ、GPSとの連結、メールやインターネット利用、音楽の取り込み、そして動画の取得までできるようになった。

実に多くの機能を持つがほんの掌サイズであり、3 もはや携帯「電話」でなく、ケータイになったのだ。ひたすら電子レンジと同じ道を歩んでいるのが現状である。でも、やがて無駄な機能を削ってケータイ技術の見直しがあるのだろうか。

電子レンジは工業革命（エネルギー利用による物資の生産・調整・改質）のいわばハードの製品だが、ケータイはもっぱらソフトを使う情報革命で、4 同じ論理で扱うと間違ふことになる。もちろん、ケータイを片手で易々と操作する若者と、老眼鏡を外して両手を使わなければボタンが押せない高齢者とは使い方は異なっており、高齢者にとっては限られた相手との短い対話が主だ

から（電話代を気にした幼い頃の記憶が染みついているのである）、単能型の携帯電話でよい。実際、そのような端末が売り出され好評である。電子レンジと同じく、技術の一部見直しは行われているのだ。

しかし、情報という抽象的な存在は、どこにでも**ビジュウナン**に入り込め、いつでも気軽に取り出せ、どうにでも料理できるという側面がある。人間の心理によくフィットするのだ。写真や動画やインターネットを見ていれば孤独感を感じないし、ただあてもなしに書き付けたブログでも誰かに読んでもらえればうれしい。ボタン操作一つで外界とつながることが楽しみの源泉である。個が分断化された現代において、ケータイは癒しの道具として欠かせなくなっているのだ。さらに将来においては、ケータイ一つで、お金の支払い、電車の乗り降り、身分証明、健康保険、運転免許、などの用が足りるようになるだろう。その意味では、ケータイの技術はさらに「進化」するに違いない。ケータイは人々の生き様や文明の質を変えながら、技術の見直しどころか、さらに広がっていくと想像されるのだ。では、それによって人間はどう変わるのだろうか。

ケータイほどの影響力はなかったが似た話はある。腕時計である。懐中時計や腕時計が一般の人々に出回るようになったのはそう古いことではなく、一九〇〇年前後である。ゼンマイ・歯車などの微細構造技術の発展によって、ようやく小型の狂わない時計が安く制作されるようになったのだ。その結果として、「**チコク**」という概念が生み出された。数秒の狂いもなく時間精度を追求する日本人の体質は、実は後天的なものと言える。江戸時代の日本人は時間に寛容であったにもかかわらず、二〇世紀に入ってから技術の力が**日本人を変貌**させた。腕時計の技術が日本人を時間の狩人に仕立て上げたのである。

今、発展途上国に携帯電話（ケータイではない）が急速に広がっている。これまでの電話なら、各戸に電話線を引くという莫大な※インフラが必要であり、それが不可能な発展途上国では限られた**dフウ層**しか持てなかった。ところが、中継局を作るだけで電話が通じるのだから、比較的安価で設備が設置できるようになった。となれば一気に携帯電話が広がるだろうことは納得でき

る。発展途上国の人々は、**B世界が小さくなったような感じ**を持って携帯電話に群がっているのである。（五〇年前の私の幼い頃、まだ村に一軒しか電話がなく、緊急の用でおそろる借りに行ったことを思い出す。携帯電話が使えるとなれば、当時の貧しいわが家でも使うようになっただろう。）

その意味では、携帯電話は安いインフラで人々を結びつけられる点において大きな効用がある。世界を知る手段が多くの人々に行き渡り、分断状態から解放されることはeカンゲイすべきことであるからだ。

しかし、通話機能に新たな機能を加えようとすると、効用ばかりではないことに注意しなければならない。無線電波を使う方式は、送ることができる情報量に限界があることだ。大容量のデータを高速で送るためには波長の短い電磁波を使わねばならず、光ファイバーなどのインフラを完備しなければならない。基本的なインフラはやはり必要なのである。

先進国は一歩進んで光ファイバー時代になりつつあるが、このままでは発展途上国は相変わらず無線方式の携帯電話に止まるだろう。南北非対称がやはり厳然と存在し続けることが予想されるのだ。発展途上国への有効な援助とは、その場限りの確立した技術を贈ることではなく、日本が科学技術立国として成功した秘訣まで伝授することだろう。その秘訣とは、確立した技術に本当に必要な付加価値をつけること、つまり技術の見直しをすることなのだ。クルマ・デジカメ・電気製品・コピー機など、日本が

優位を誇っている技術はすべてこのような論理で有効性を発揮してきたのだから。

(池内 了^{たかひろ} 『科学の落とし穴』より)

注 ※ イノベーション…新商品の開発。

※ インフラ…何らかのシステムや事業を有効に機能させるための基盤となる設備。

問一 線部 a～e のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 I Ⅳ に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア では イ やはり ウ たとえば
エ しかし オ あたかも カ さらに

問三 線部1「『発明は必要の母』」とありますが、その具体的な説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア コピー機があまりにも多機能になってしまったため、かえって使いづらくなった。
イ 多機能で高画質の大型テレビが発売されたので、今まで使っていたテレビでは不十分だと思ふようになった。
ウ 自分で勝手に掃除してくれる多機能掃除機があればいいと思つていたら、ようやく最近になつて発売された。
エ 地球温暖化防止が世界的な課題となつて、二酸化炭素の排出を抑えたエコカーが発売されるようになった。
オ 何千曲も保存できる多機能音楽プレーヤーが発売されたが、それほど多くの曲を保存する必要をあまり感じない。

問四 線部2「このような相乗作用」とは、誰と、誰が、それぞれどうすることをいうのですか。本文中の言葉を使って、八十字以内で説明しなさい。

問五 線部A「宝の持ち腐れ」について、この言葉の使い方として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大切な話も、聞く耳を持たなければ宝の持ち腐れになる。
イ 幼稚園からの友達である彼女と私は、宝の持ち腐れです。
ウ いざというときにきつと君の役に立つのが、宝の持ち腐れだよ。
エ どんなに才能があっても、それを発揮しなければ、宝の持ち腐れになる。
オ 困難な状況の時こそ頑張らなければ、宝の持ち腐れになる。

問六 線部3「もはや携帯『電話』でなく、ケータイになったのだ」とありますが、それはどういうことですか。本文中の葉を使って、三十字以内で説明しなさい。 言

問七 線部4「同じ論理で扱うと間違ふことになる」とありますが、それはどういうことですか。それを説明した次の文の欄A、Bに当てはまる言葉を、それぞれ本文中から四十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。 空

「ハードの製品」は、
A
のに対して、「ケータイ」の方は、
B
と想像されるから、同じ道筋では変化していかないことになる、ということ。

問八 線部5「日本人を変貌へんぼうさせた」とありますが、日本人はどのように「変貌」したのですか。その変化がわかるように、

本文 中の言葉を使って、六十字以内で説明しなさい。

問九 線部B「世界が小さくなったような感じを持って携帯電話に群がっているのである」の文節の数を漢数字で答えなさい。
また、含まれている動詞の数を漢数字で答えなさい。

問十 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 老眼鏡を外して両手を使わなければケータイのボタンが押せない高齢者のために、今後あらゆる工業製品は、技術の見直しが行われ、単能型のものになっていくであろう。

イ 個が分断された現代において、ケータイは癒しの道具として欠かせなくなっており、今後ケータイによって人間がどう変わるかわからないため、できる限りケータイは使わないようにしたほうがよい。

ウ 発展途上国においても、基本的なインフラが必要でない携帯電話やインターネットは、多くの人々を結びつけ、世界を知る手段として、先進国と同じように急速に広がっている。

エ 発展途上国への有効な援助とは、発展途上国の人々自身が自分たちにとって本当に必要な付加価値をつけるよう、贈られた技術を見直していくという考え方も、同時に伝授することである。

オ 科学技術立国として成功した日本は、今後、クルマ・デジカメ・電気製品・コピー機以外にも、資源を浪費したり、環境を破壊したりしない製品の開発に努力していかねばならない。

□ 次の文章は、宮本輝『泥の河』の一節で、主人公の「信雄」が友人の「喜一」と二人だけで天神祭に出かける場面である。「信雄」の父親は、二人を天神祭に連れて行ってやるつもりだったが、「信雄」の母親の体調が思わしくないことから、二人に小遣いをわたし、子どもたちだけで天神祭に行かせることになった。これを読んで、後の問いに答えなさい。

二人は夕暮れの道を駆けだした。

近くといっても、信雄の家から浄正橋までは歩いて三十分近くもかかる距離であった。堂島川のほとりを上っていき、堂島大橋を渡って北へ歩いて行くうちに、※お囃子の音が大きく聞こえてきた。

大通りを曲がり、※仕舞屋が a 軒を連ねる筋に入ると、陽の沈むのを待ちあぐねた子供たちが、道にうずくまってもう花火に火をつけている。酒臭いはつ姿の男が、同じ b 柄のはつびを着た幼子を肩に乗せて、ぶらりぶらりと歩いている。そのあとを足どりも軽く神社に向かう喜一と並んで歩きながら、にわかにはつびを肩にのせて祭囃子に耳を傾けていると、信雄はなにやら急に心細くなってきた。

「僕、お金持って遊びに行くのん、初めてや」

ときどき立ち停まると、1喜一はそのたびに掌を開いて、晋平からもらった硬貨の数を確かめた。信雄は自分の金をそっくり喜一の掌に移した。

「僕のと合わしたら、何でも買えるで」

「そやなあ、あれ買えるかも知れへんなあ」

信雄も喜一も、火薬を詰めて飛ばすロケットのおもちゃが欲しかったのである。恵比須神社の※縁日でも売っていたから、きっと今夜も売っているはずであった。

天満宮のような巨大な祭りではなかったが、それでも商店街のはずれから c 境内への道まで露店がひしめきあっている。人通りも多くなり、スルメを焼く匂いと、露店の莫塵の上で白い光を発している※カーバイドの悪臭が、暗くなり始めた道にたちこめて、

信雄も喜一もだんだん祭り気分にかかれていった。

喜一は硬貨をポケットにしまい、信雄の手を握った。

「はぐれたらあかんで」

人混みを縫いながら、二人は露店を一軒一軒見て歩いた。

水飴屋の前に立ったとき、

「一杯だけ買って、半分ずつ飲めへんか？」

と喜一が誘った。ロケットを買ってからにしようという信雄の言葉でも同じことをせびった。飲み物や食べ物売る店の前に来ると、喜一は必ず信雄の肘を引っぱって誘うのだった。

「きつちゃん、ロケット欲しいことないんか？」

喜一の手を振りほどくと、信雄は怒ったように言った。

「ロケットも欲しいけど、僕、いろんなもん食べてみたいわ」

口をとがらせて、**2喜一は脛の虫さされのあとを強く掻きむしった。**

いつのまにか空はすっかり暗くなり、商店街に吊るされたちようちんにも裸電球にも灯が入って、急激に増してきた人の群れがその下で押し合いへし合いしている。

すねたふりをして一步も動こうとしない喜一を尻目に、信雄はひとり境内に向かって歩きだした。歩き始めると、人波に押されて立ち停まることもできなくなってしまう。喜一の顔が遠ざかり見えなくなった。

信雄は慌てて引き返そうとした。色とりどりの浴衣や団扇や、汗や化粧の匂いが、大きな流れとなって信雄を押し返す。やっこの思いで元の場所に戻って来たが、喜一の姿はなかった。

信雄はびよんびよん跳びあがってまわりを見渡した。いつのまにすれちがったのか、人波にもまれている喜一の顔が、神社の入口のところで見え隠れしていた。

「きつちゃん、きつちゃん」

信雄の声は、子供たちの喚声や祭り囃子に消されてしまった。喜一は小走りで先へ先へと進んでいく。相当A狼狽して信雄を捜しているふうであった。

信雄はおとなたちの膝元をかきわけ、必死で走った。何人かの足を踏み、ときどき怒声を浴びて突き飛ばされたりした。境内の手前にある風鈴屋の前でやっと喜一に追いついた。赤や青の短冊が一斉に震え始め、それと一緒に、何やら胸の底に突き立つてくるような冷たい風鈴の音に包み込まれた。

信雄は喜一の肩をつかんだ。喜一は泣いていた。泣きながら何かわめいた。

「えっ、なに？ どないしたん？」

よく聞きとれなかったので、信雄は喜一の口元に耳を寄せた。

3
「お金、あらへん。お金、落とした」

風鈴屋の屋台からこぼれ散る夥しい短冊の影が、喜一の歪んだ顔に映っていた。

信雄と喜一はもう一度商店街の端まで行き、地面を睨みながらじぐざぐに歩いた。再び風鈴屋の前に戻って来たが、落とした硬貨は一枚もみつからなかった。喜一のズボンのポケットは、両方とも穴があいていた。

信雄が何を話しかけても、喜一は黙りこくったままだった。人波に乗って二人は境内に流されていった。

一台のだんじりが置かれ、その中で数人の男がお囃子を奏でていた。同じ旋律の執拗な繰り返しに※酩酊した男たちは、裸の体から粘りつくような汗を絞り出している。数珠繋ぎに吊るされた裸電球が、だんじりのまわりでびりびり震えていた。

信雄は石段に腰をおろし、ちょうど目の前に佇んで誰かを待っているらしい浴衣姿の少女を見つめた。その少女の持つ廻り灯籠の中で、黒い屋形舟が廻っている。

鈍い破裂音が聞こえ、それと一緒に硝煙の匂いがたちこめた。信雄と喜一の前にプラスチック製の小さなロケットが落ちてきた。境内の奥に、とりわけ子供たちの集まっている露店があり、おもちゃのロケットが莫産に並べられていた。喜一が足元のロケット

をすばやく拾いあげ、信雄の手を引いてその露店のところまで走った。

はちまき姿の男は莫塵に坐^{すわ}ったまま喜一の手からロケットを受け取り、

「サンキュー、サンキュー、ご苦労さん」

と潰^{つぶ}れた声で言った。

信雄と喜一は顔を見合わせて笑った。

「それ、なんぼ？」

「たつたの八十両、どや、安いやろ」

二人はまた顔を見合させた。二つも買えたうえに、焼きイカが食べられたではないか。

「さあ、もういつペンやつて見せたるさかい、買うていけよ！」

危ないぞオ、月まで飛んで行くロケットじゃあと叫びながら、男は短い導火線に火をつけた。信雄も喜一も慌てて二、三步とびのくと、B固唾^{こつ}を呑んで導火線を見つめた。

大きな破裂音とともに、ロケットは斜めに飛び上がり、銀杏^{ぎんぎょう}の木に当たって賽銭箱^{さいせんばう}の中に落ちた。慌てて追いかけて行く男の姿が、見物人の笑いをかった。信雄も笑った。笑いながら喜一の顔を見た。4喜一はなぜかあらぬほうに視線を注いでいた。

「ちえっ、あんなところに落ちてしたら、もう取られへんがな」

走り戻って来て、男は莫塵の上にあぐらをかき、八ツ当たりぎみに怒鳴った。

「こら、甲斐性^{かいせい}なし！ こんなおもちやの二つや二つ、よう買わんのんかい。ひやかしだけのやつはどこぞに行きさらせ」

「のぶちゃん、帰ろ」

喜一が信雄の肩をつつき、足早にだんじりの横をすり抜けて行った。

「早^{はや}よ行こ、早^{はや}よ行こ」

喜一は笑って叫んだ。人の波はさらに増して、神社の入口でうずを巻いている。

人混みを避けて路地の奥に駆け入ると、喜一は服をたくしあげた。おもちゃのロケットがズボンと体の間に挟み込まれていた。「それ、どないしたん？」

「おっさんがロケット拾いに行きよったとき、盗ったんや。これ、のぶちゃんにやるわ」
信雄は驚いて喜一の傍から離れた。

「盗ったん？」

得意そうに頷いている喜一に向かって、信雄は思わず叫んだ。

「そんなんいらん。そんなことするのん、泥棒や」

5 信雄の顔を、喜一は不思議そうに覗き込んだ。

「いらんのん？」

「いらん」

口汚なく怒鳴っていた※香具師から、まんまとロケットを盗んできたことは、信雄にも少し痛快なことであつた。だが彼は心とはま
ったく裏腹な言葉で喜一をなじっていた。喜一の手からロケットを奪い、足元に投げつけた。そして小走りでも人混みの中にお
けいっていった。喜一はロケットを拾い、追いつがって来て、また言った。

「ほんまにいらんのん？」

自分でもはつとするほど烈しい言葉が、信雄の口をついて出た。

-6
泥棒、泥棒、泥棒

人波をかきわけかきわけ、信雄はむきになって歩いた。喜一の悲痛な声がうしろで聞こえた。

「ごめんな、ごめんな。もう盗んだりせえへん。のぶちゃん、僕、もうこれから絶対物盗ったりせえへん。そやから、そんなこと
言わんとつてな。もうそんなこと、言わんとつてな」

振り払っても振り払っても、喜一は泣きながら信雄にまわりついて離れなかった。二人は纏れ合いながら、少しずつ祭りの賑

わいから離れていった。

注 ※ お囃子：各種の芸能や祭りで、情趣を添えるために伴奏する音楽。

※ 仕舞屋：もともと商店だったが現在は店を閉じている家。

※ 縁日：神社や仏閣の参詣人を目当てにした露店の集まり。

※ カーバイド：燃やして灯りの代わりにする炭化物。

※ 酩酊：ひどく酒に酔った状態。

※ 香具師：縁日などで見せ物をしたり物売りをしたりする人。

問一 線部 a、c の漢字の読み方をそれぞれ答えなさい。

問二 線部 A 「狼狽して」、B 「固唾を呑んで」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 息を切らせて

イ 覚悟を決めて

A 「狼狽して」

ウ あわてふためいて

エ 孤独な気持ちにおそわれて

B 「固唾を呑んで」

ア 事のなりゆきを案じて緊張して

イ 固まった唾液をのみこんで

ウ 困難に立ち向かおうとして

エ 身の危険をかえりみないで

オ 何かにとりつかれたようにして

オ 互いに意識を集中しあって

問三 —— 線部1「喜一はそのたびに掌を開いて、晋平しんぺいからもらった硬貨の数を確かめた」とありますが、この時の「喜一」の様子を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 何度も金額を確かめることによって、初めて小遣いを持って祭りに来たうれしさをかみしめている。

イ 初めてお金を持って祭りに来た興奮を抑えるために、意識的に金額を数えるようにしている。

ウ 夜に子どもだけでお祭りに来たことがなかったので、どうしてよいかわからずにとまどっている。

エ 友達のお父さんからもらった小遣いがいくらなのかをはっきりさせておこうとしている。

オ 買いたいものが実際に買えるのかどうかを心配して何度も金額を確認している。

問四

I

に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いそいそ

イ おずおず

ウ こそこそ

エ ばたばた

オ しぶしぶ

問五 —— 線部2「喜一は脛すねの虫さされのあとを強く掻きむしった」とありますが、この時の「喜一」の心情を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 欲しいものを再確認できて素直に喜んでいる。

イ 食べ物誘惑に負けないよう自分を戒めている。

ウ 目的のものを見失いかけていた自分を責めている。

エ 自分の思い通りにならないことにいらだっている。

オ 自分の体を傷つけることによって信雄に抵抗している。

問六 —— 線部3 「お金、あらへん。お金、落とした」とありますが、このことを予感させる情景描写の一文を抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問七 —— 線部4 「喜一はなぜかあらぬほうに視線を注いでいた」とありますが、「喜一」がこのような行動をとったのはなぜですか。三十字以内で説明しなさい。

問八 —— 線部5 「信雄の顔を、喜一は不思議そうに覗き込んだ」とありますが、この時の「喜一」の気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問九 ——線部6「泥棒、泥棒、泥棒」とありますが、この時の「信雄」を説明したものととして、最も適当なものを次の中から
選び、記号で答えなさい。

- ア 「喜一」の友達思いの気持ちが盗みをさせたことは理解しているため、この瞬間だけ強く叱しっておこうとしている。
- イ 香具師に対して反感もあったが、してはいけないことをした「喜一」の行為を許すことができずに責め立てている。
- ウ 「喜一」の弁償しようとする気持ちもわからないではないが、盗みをはたらいたことは絶対に許せないと考えている。
- エ これまでも「喜一」に対して違和感を覚えていたが、盗みを目の当またりにして友達の間を続けられないと感じている。
- オ 「喜一」が盗みという行為をあまりにも軽く考えていることに驚き、友人として何が何でも反省させたいと思っている。

問十 「信雄」の人物像として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大切な友人を喜ばそうとするあまり悪事に手を染めてしまう精神的に未熟な少年。
- イ 自分の思いを実現するために絶対に友人の要求を受け入れない偏屈で頑固な少年。
- ウ 正義感が強いために感情的になることもあるが、思いやりのある心やさしい少年。
- エ 周囲の雰囲気にもまれて何事にもつい行きすぎた行動をとってしまう子どもっぽい少年。
- オ 自分に不利益が生じたことを他者の責任にし、その他者を厳しく非難する攻撃的な少年。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

天下※干ばつしける年、1よろづの所の田みな※焼け失せぬと2ののしるに、ましてこの田は賀茂川の水を入れて作れる田なれば、その川の水絶えにければ、庭のやうになりて、苗もみな赤みぬべし。しかるに、高陽親王これを※構へけるやう、3たけ四尺ばかりなる童の左右の手に器をささげて立てる形をつくりて、この田の中にア立て、人その童の持ちたる器に水を入れるれば、盛り受けて顔に流しかけ流しかけすれば、これを興じて聞きつぎつつ、京中の人、市をなして集まりて、水を器に入れて、見興じののしること限りなし。かくのごとくイする間に、水おのづからたまりて田に水多く満ちぬ。かくのごとくして、4その田つゆ焼けずしてやみにけり。

これいみじき構へなり。これも親王のきはめたる物の上手、5風流の至せるところなりとぞ人ほめける、となむ語り伝へたるとや。

(『今昔物語集』より)

注※ 干ばつ…日照りが続くこと。

※ 焼け失せぬ…水が干上がってしまう。

※ 構へける…工夫した。

※ 四尺…約一メートル三十三センチ。一尺は約三十三・三センチメートル。

問一 ———— 線部「構へけるやう」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

問二 ———— 線部ア「立て」、イ「する」の動作主を、それぞれ文中から抜き出して答えなさい。

問三 —— 線部 1 「よろづの」、2 「ののしる」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そのあたりの

ア 大声で悪口を言う

1 「よろづの」 イ 役に立つ

2 「ののしる」 イ 大声で助けを呼ぶ

ウ 世の中の

ウ 大声で言い騒ぐ

エ いろいろな

エ 大声ではしゃぐ

問四 —— 線部 3 「たけ四尺ばかりなる董の左右の手に器をささげて立てる形」とありますが、これにはどのようなしかけがほどこされていますか。現代語で三十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線部 4 「その田つゆ焼けずしてやみにけり」とありますが、その理由を三十字以内で現代語で説明しなさい。

問六 —— 線部 5 「風流の至せるところなりとぞ人ほめける」について、次の問いに答えなさい。

(1) この表現に用いられている古文独特の決まりを何といいますか。

(2) どういうところが「風流の至せるところ」なのですか。それを説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 高陽親王が、庭に人形を作って雨を降らし、人々を救ったところ。

イ 高陽親王が、田に賀茂川の水を引くための工夫をし、人々を救ったところ。

ウ 高陽親王が、京の市場に立てた人形が評判になり、人々を救ったところ。

エ 高陽親王が、他の人が思いもつかないような趣向によつて、人々を救ったところ。

オ 高陽親王が、人形を見に来る人から集めたお金で、人々を救ったところ。

問一	a	撮影
d	富裕	
問一	b	柔軟
e	歓迎	
問一	c	遅刻

問二	I	オ
問二	II	ウ
問二	III	エ
問二	IV	ア
問三		イ

問四	つ	だ	の	売
問四	い	っ	欲	る
問四	た	た	望	側
問四	製	と	を	が
問四	品	錯	刺	次
問四	を	覚	激	々
問四	買	し	し	と
問四	お	て	、	余
問四	う	滅	消	分
問四	と	多	費	な
問四	す	に	者	機
問四	る	使	も	能
問四	こ	い	そ	を
問四	と	も	ん	付
問四	。し	な	な	加
問四		な	機	し
問四		い	能	て
問四		機	が	消
問四		能	必	費
問四		が	要	者

問五	エ
----	---

問六	に	声
問六	な	の
問六	っ	交
問六	た	換
問六	こ	だ
問六	と	け
問六	。で	
問六		な
問六		く
問六		、
問六		多
問六		く
問六		の
問六		機
問六		能
問六		を
問六		持
問六		っ
問六		よ
問六		う

問七	B	A
問七	人	い
問七	々	っ
問七	の	た
問七	生	ん
問七	き	多
問七	く	く
問七	が	と
問七	っ	回
問七	て	帰
問七	い	す
問七	く	る

問八	度	計	日
問八	を	の	本
問八	追	技	人
問八	求	術	は
問八	す	に	も
問八	る	よ	と
問八	よ	っ	も
問八	う	て	と
問八	に	、	時
問八	な	数	間
問八	っ	秒	に
問八	た	の	寛
問八	と	狂	容
問八	い	い	だ
問八	う	も	っ
問八	こ	な	た
問八	と	く	が
問八	。時		、
問八		間	腕
問八		精	時

問九	文節の数	九
問九	動詞の数	五
問十		エ

問一	a	の	き
問一	b	が	ら
問一	c	け	い
問一		だ	い
問二	A	ウ	
問二	B	ア	

問三	ア
問四	オ
問五	エ
問六	赤
問六	や
問六	青
問六	の
問六	短

問七	か	口
問七	そ	ケ
問七	う	ッ
問七	と	ト
問七	し	を
問七	た	盗
問七	か	ん
問七	ら	だ
問七	。こ	
問七		と
問七		が
問七		ば
問七		れ
問七		な
問七		い
問七		よ
問七		う
問七		に
問七		ご
問七		ま

問八	が	の	欲
問八	わ	に	し
問八	か	、	が
問八	ら	喜	っ
問八	な	ぶ	て
問八	い	ど	い
問八	気	こ	た
問八	持	ろ	口
問八	ち	か	ケ
問八	。自	ツ	
問八		分	ト
問八		の	を
問八		こ	や
問八		と	る
問八		を	と
問八		責	言
問八		め	っ
問八		る	て
問八		信	い
問八		雄	る

問九	イ
問十	ウ

問一	かま	え	ける	よう
問二	ア	高	陽	親
問二	イ	京	中	の
問三	1	エ		
問三	2	ウ		

問四	る	手
問四	と	に
問四	い	持
問四	う	っ
問四	し	た
問四	か	器
問四	け	に
問四	。水	
問四		を
問四		入
問四		れ
問四		る
問四		と
問四		、
問四		顔
問四		に
問四		流
問四		し
問四		か
問四		け

問五	田	人
問五	に	々
問五	た	が
問五	ま	お
問五	っ	も
問五	た	し
問五	か	ろ
問五	ら	が
問五	。っ	
問五		て
問五		人
問五		形
問五		に
問五		流
問五		し
問五		か
問五		け
問五		た
問五		水
問五		が

問六	(1)	か	か	り	結	び	(の	法	則)
問六	(2)	エ							

